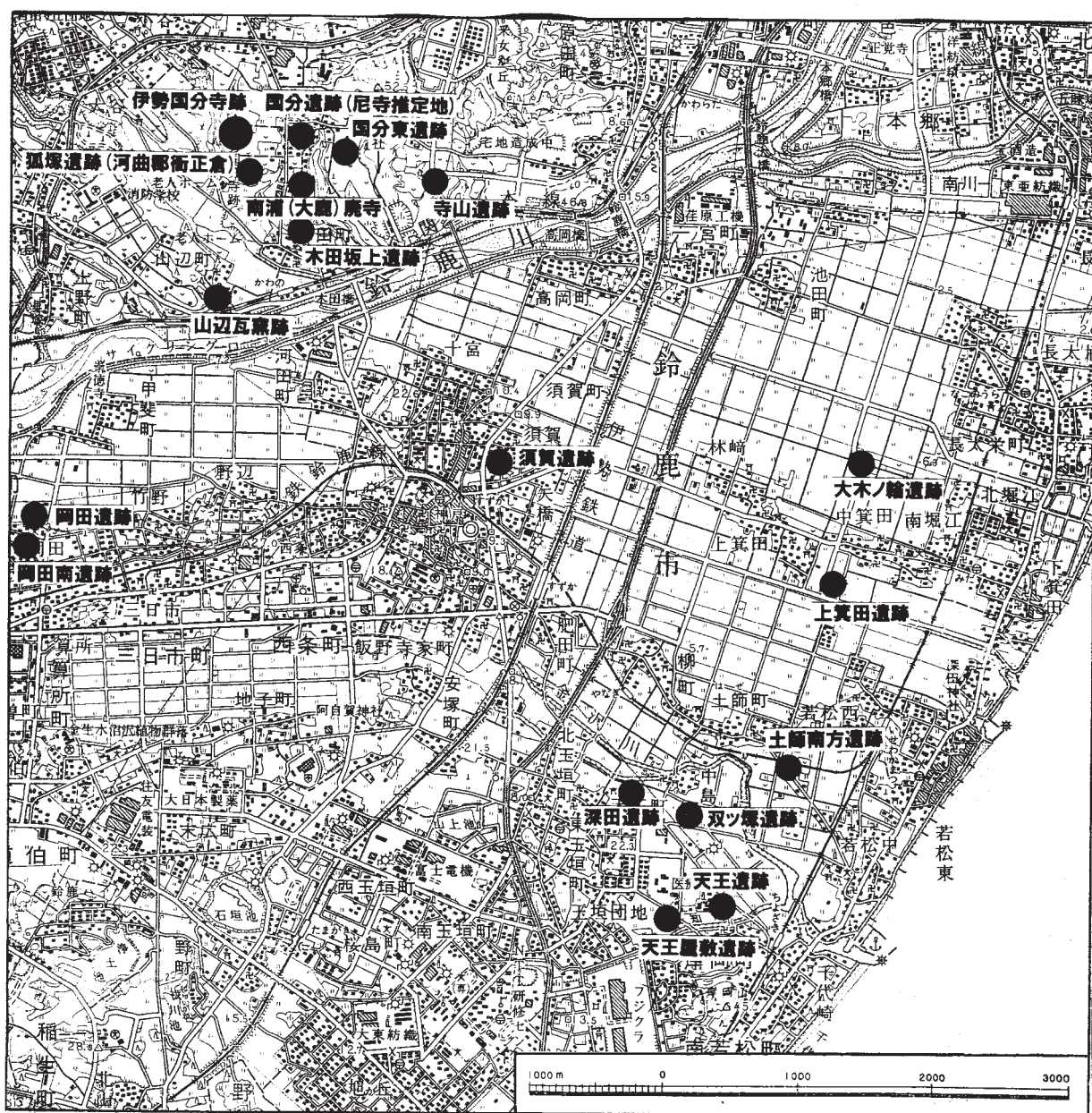


伊勢国分寺跡

第28次発掘調査現地説明会資料



遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000)

1. はじめに

国分寺とは奈良時代、聖武天皇の詔（741年）により各国に置かれた寺院です。僧寺と尼寺の二寺からなります。鈴鹿市国分町に所在する伊勢国分寺跡は、大正11年10月12日に国の史跡に指定されました。この遺跡は僧寺だと考えられ、尼寺の遺跡は国分町の集落一帯に位置する国分遺跡ではないかと考えられています。

昭和63年～平成2年の範囲確認調査により、築地塀に囲まれた寺院の範囲（伽藍地）が約180m四方であることが確認されました。その成果をもとに鈴鹿市では史跡の全域と周囲の土地を平成7年から3箇年をかけて公有地化しました。

平成11年度からは、史跡公園整備に先立つ伽藍（主要な堂塔）確認の調査に着手しました。同年度の調査では、まず講堂の基壇が確認されました。平成12年度には講堂と金堂の調査を行い、講堂基壇の規模が東西32.7m×南北20.6mであること、金堂基壇の創建期の規模が東西30.5m×南北21.9mであることを確認しました。平成13年度の調査では、東西19.5m×南北11.9mの中門基壇および中門と金堂を結んで金堂院を構成する東西68m×南北51m、幅6～7mの回廊を確認しました。今年度の第28次調査では、すでに南北11.2m×東西17.6mの規模の南門基壇を確認しています。

2. 今年度の調査

伊勢国分寺跡のこれまでの調査の結果、南門・中門・金堂・講堂の主要伽藍の主軸は伽藍地の西側3分の1に偏ることが確認されています。そのことから東側の広いスペースに塔が建てられていた可能性が高いと考えられていました。今回の調査は、その範囲を中心に塔基壇の確認を試みました。金堂の東側に、以前畑を水田として床下げした際に多量の瓦が出土した個所がありますので、ここを「塔推定地調査区」として面的に調査を行いました。

また同調査区の南方と回廊西側および講堂東側ではトレンチ調査を実施しました。トレンチ調査に伴って伽藍地南東隅から大型の柱穴を検出したため、その範囲を新たに「南東隅調査区」として追加して面調査を行いました。

【塔推定地調査区の調査】

調査に着手するとまず東西に走る2条の溝SD0209とSD0205が見つかりました。これらの溝は瓦を含み、約2.4mの間隔をおいて平行しています。このことから、この2条の溝の間は削平され何ら痕跡は残されていないものの築地塀SA0203が存在し、両溝はその側溝であったと考えられます。

SD0205とSD0209を西に追っていくと、調査区の西端で2条の南北方向の溝SD0210とSD0212に「└」状につき当たっていることが確認できました。溝SD0210とSD0212も同様に含み2.4mの間隔をおいて平行することから、築地塀SA0206の側溝と考えられます。

東側では、SD0205はそのまま続き、SD0209は一旦途切れた後SD0216として続いています。調査

区東端では、伽藍地東辺の削平された築地塀SA0219の基底部(幅約2.7m)とその側溝SD0217・SD0218が確認されました。築地塀SA0230はこの東辺築地塀につき当たっていると推定されますが、接するあたりに大きな攪乱土坑(穴)SK0242があるため確認はできませんでした。

これらの築地塀は国分寺に伴うもので、築地塀SA0206は伽藍地の東側約3分の1を区画し、さらにその区画を築地塀SA0203が南北に2分していると考えられます。つまり、伽藍地の東寄りには築地塀で区画された何らかの機能を持つ院を構成しているようです。南北方向の築地塀SA0206と中心伽藍の主軸の距離は芯々で約53m、伽藍地東辺築地塀SA0219との距離は約64mあります。東西方向の築地塀SA0203と伽藍地南辺築地塀SA0222間の距離は約96mあります。

その他の、国分寺より遡る遺構として3間×3間の総柱掘立柱建物(倉庫)SB0232、竪穴住居あるいは竪穴状土坑SI0231・SI0235・SI0236があり、7世紀代のものと考えられます。

国分寺以降の遺構としては、SD0207、SD0215など中世以降の耕作に伴う用排水路あるいは地境溝が多数みられます。SK0246は時期不明ですが火葬土坑です。また、SD0205とSD0207の間に道路の跡SC0204があり、路盤を作るに際して浅い土坑を連続して掘った波板状圧痕が観察できます。また、SK0242・SK0239・SK0245・SK0243など耕作等で不要になった瓦を処理するために掘られたとみられる土坑が多数見られます。

出土遺物はほとんどが瓦類です。わずかに須恵器・土師器・灰釉陶器・山茶碗などの破片が見られます。軒瓦類には従来の国分寺跡で見られる蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦のほかに、伊勢国府跡(長者屋敷遺跡)からもたらされたとみられる重圈文軒丸瓦・重廓文軒平瓦がかなり目立ちます。また、国府系の鬼瓦の破片も出土しています。しかし、残念ながらほとんどが新しい遺構や攪乱から出土してどの建物に伴ったものかは分かりません。

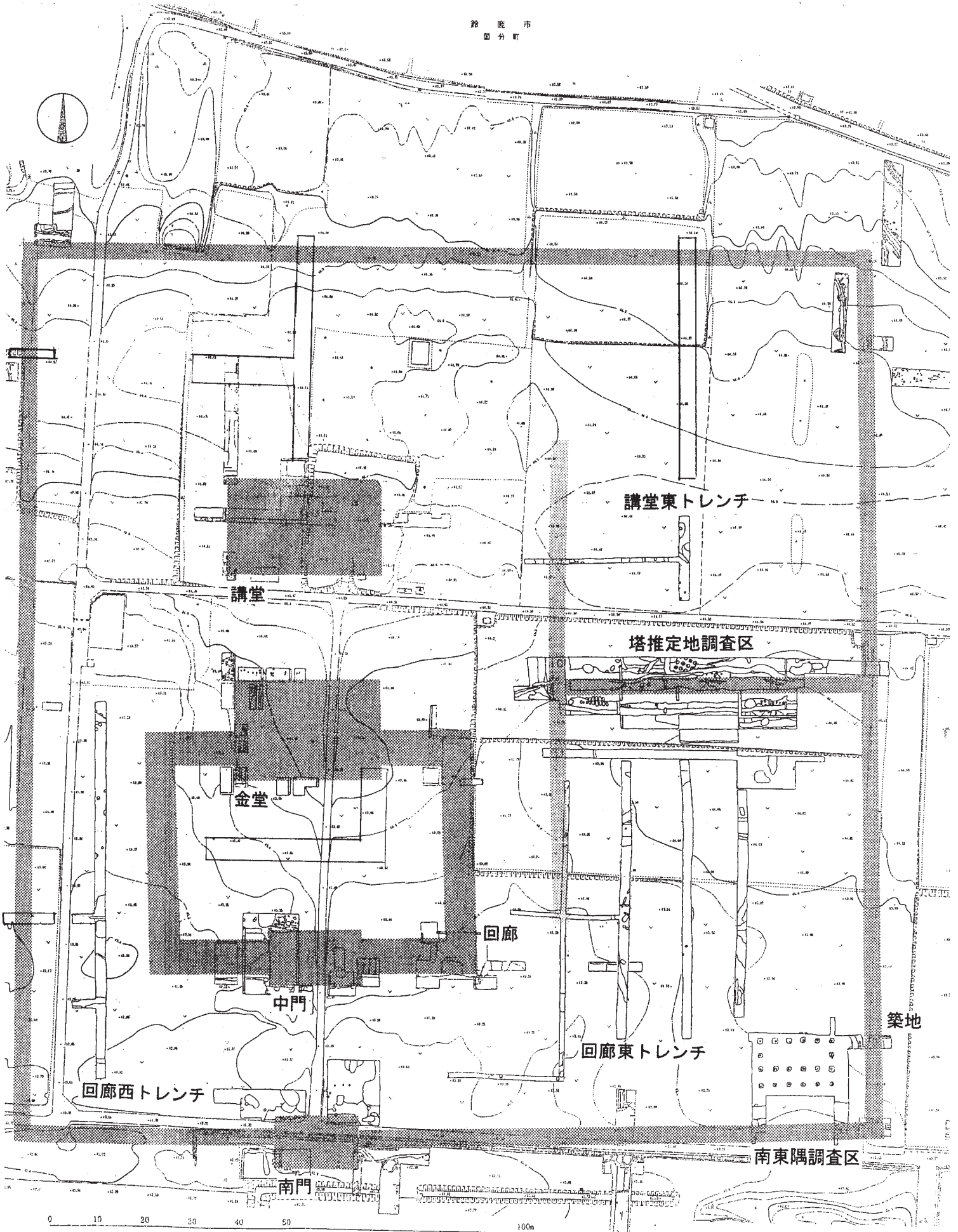
【トレンチ調査】塔推定地調査区の南側で、回廊の東側にあたる範囲には南北方向のトレンチ(試掘溝)を12m間隔で4条、補足的な東西トレンチを3条設定しました。北側で瓦を含む東西溝を2条検出したものの、基壇基礎地業など棟の存在をうかがわせる遺構は検出されませんでした。

回廊西側にも1条の南北方向のトレンチを入れましたが、国分寺に伴うと見られる遺構は検出されませんでした。

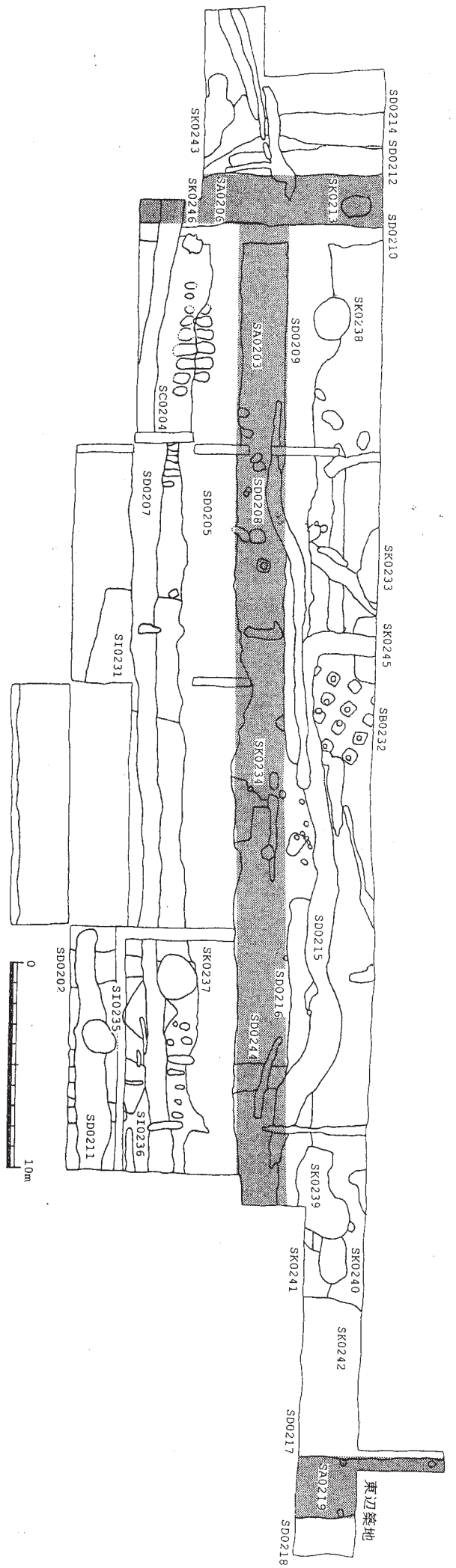
さらに、金堂東に設定した東西方向トレンチでは、塔推定地調査区で検出された溝SD0210とSD0212の延長と見られる瓦を含む溝が確認されています。

【南東隅調査区の調査】

回廊東トレンチの一部、伽藍地南東隅から大型の掘立柱建物柱穴列が検出されました。規模の大きさ、そして方位が中心伽藍と揃っていることから国分寺に関連する重要施設と考え、南東隅調査区として面的に調査しました。検出された掘立柱建物SB0220は、伽藍地南東隅にびったり収まるように建てられています。2間×5間の南面に庇を持つ大型の建物です。柱間は身舎



国史跡伊勢国分寺跡発掘予定地位置図(S=1/1,000)

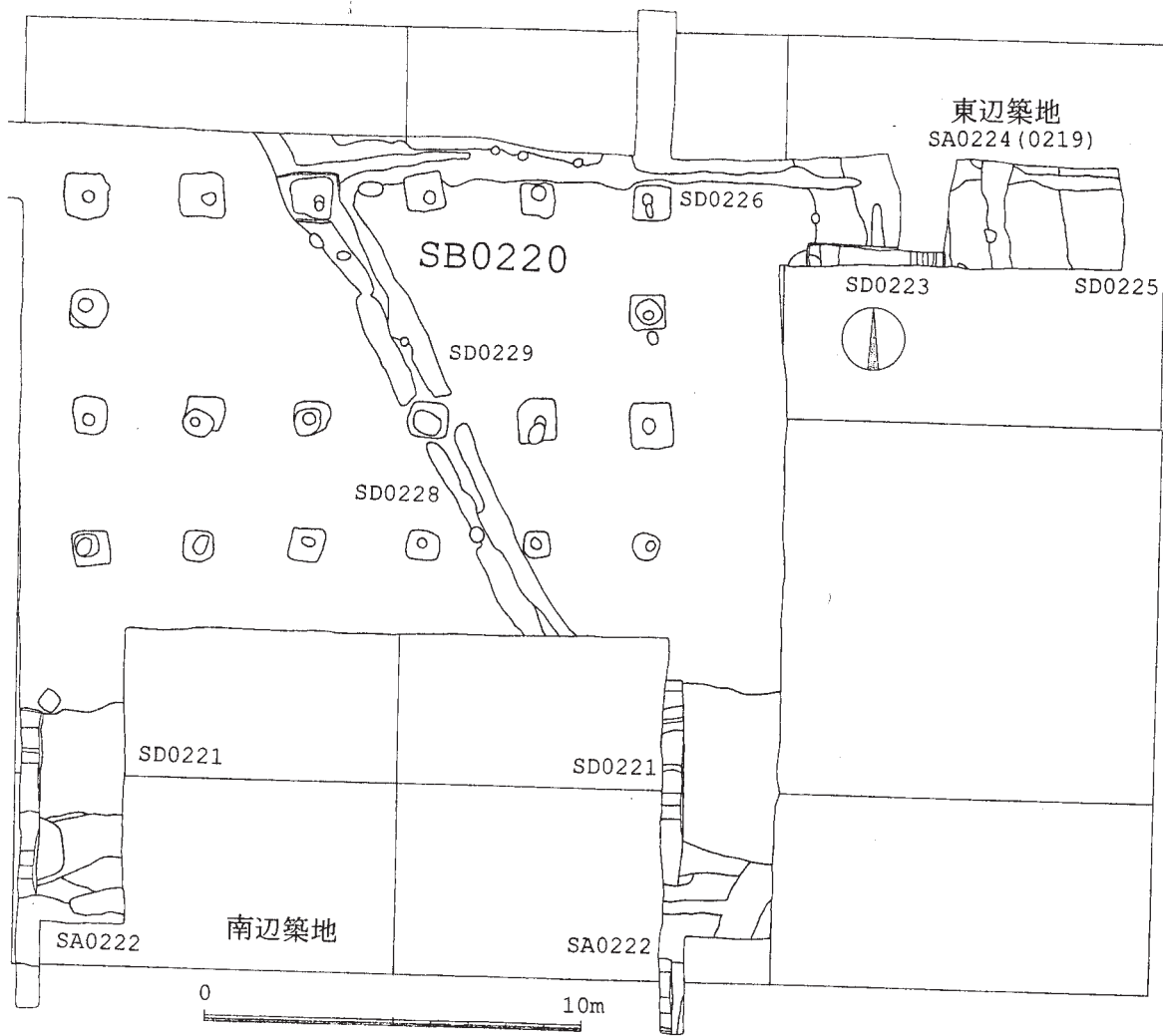


塔推定地調査区遺構配置図(S=1/200)

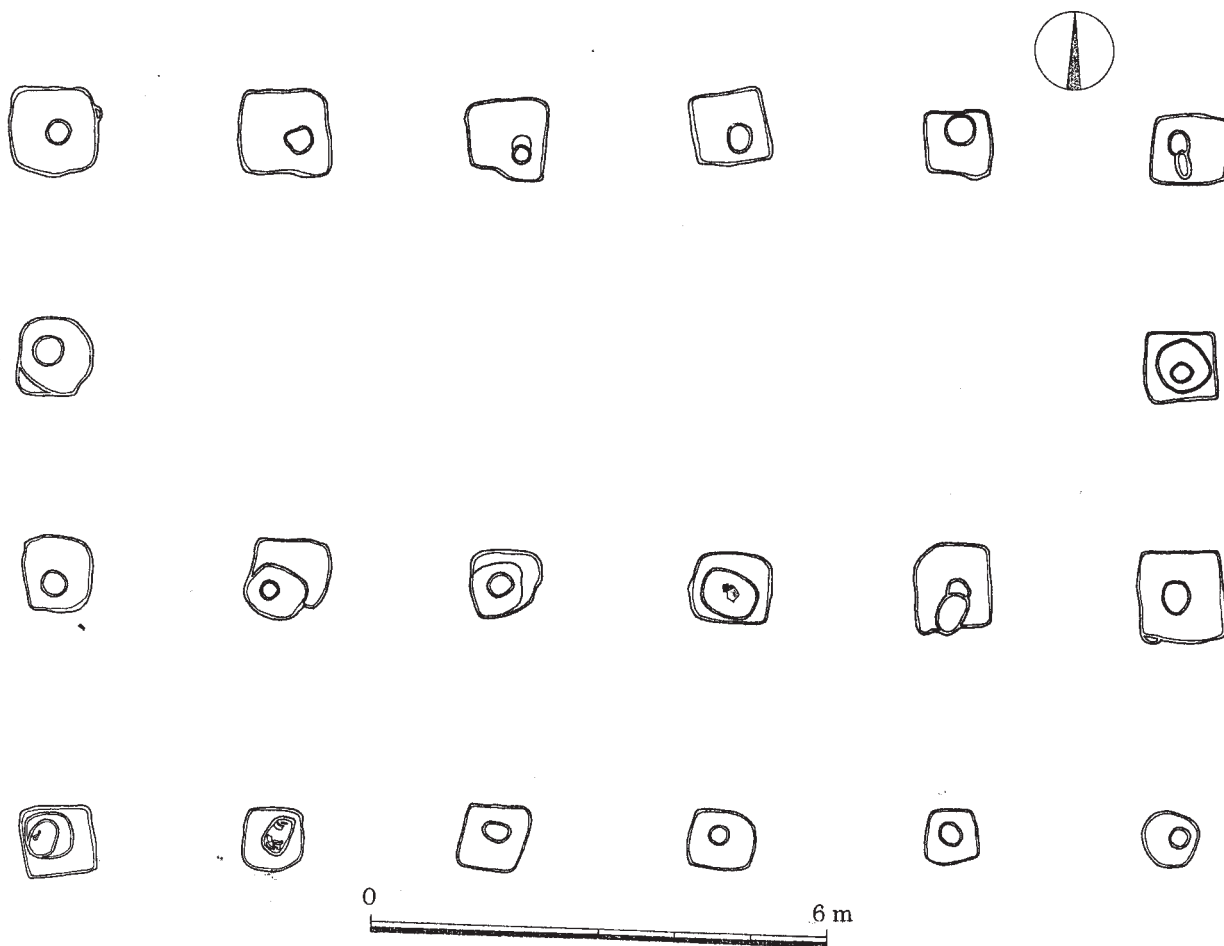


(原図を70%縮小)

塔推定地調査区出土瓦(S=1/4)



南東隅調査区遺構配置図(S=1/200)



が3m(10尺)、庇の出が3.3m(11尺)、つまり15m×9.3mの大きさです。

時期は、柱の掘り方(柱を据えるための穴)からは瓦片が出土しないので国分寺の創建とほぼ同時期と考えています。このような伽藍地の南側隅に建てられた大型建物の例としては上野国分僧寺(南西隅で、4間×2間で両面庇)があります。このような建物の性格としては、寺院の運営にかかわる政所院・大衆院、講師が居住する講師院、そして造営にともなう寺務所などが考えられますが、今回の調査では性格を特定できるような遺物は出土しませんでした。

調査区の一部を拡張して伽藍地東辺築地 SA0224(0219)と両側溝 SD0223・SD0225 および南辺築地 SA0222 と内溝 SD0221 を検出しました。東辺築地の基底部は幅3mを測ります。築地塀から掘立柱建物 SB0220 までの距離は東辺からは8m、南辺からは9mを測ります。

【さいごに】

今回の調査では残念なことに最大の目的であった塔跡の確認はできませんでした。塔がないとするとこの国分寺跡が塔を持たない尼寺であったことになってしまいます。しかし、まだ回廊内など塔が立地する可能性がある箇所が残されていますので、塔については来年度も慎重に調査を進める予定です。

伽藍地内をさらに区画する築地塀と、南東隅に立地する大型掘立柱建物の発見は国分寺の内部の構造や機能を考えるうえで大変興味深いものがあります。全国の国分寺研究に貴重なデータを提供することができたといえるでしょう。この区画内にどのような施設があったのかも今後の調査の大きな課題といえましょう。

鈴鹿市考古博物館

三重県鈴鹿市国分町 224

TEL0593-74-1994 FAX74-0986

E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>